

「半道敵」のドラマトルギー

—— 出口逸平「研辰の系譜」のこと

長谷川 郁夫

出口逸平さんは幼いときからの芝居好き、と聞く。小学校低学年の頃から毎週土曜日の午後には、テレビに鬻りついて吉本新喜劇に夢中になった。松竹新喜劇に親しんだのもその頃からのことだろう。大阪の子供である。中学・高校では演劇部に属して演技・演出に熱中した、という。大学に進んで近世・近代文学を専攻、おもに芸能史、演劇史を研究テーマに選んだ。いまでも年に百本の観劇を目標にして、いそいそと劇場へと足を運ぶ。新劇、前衛劇、歌舞伎と、そのレパートリーは驚くほど広い。

また、忘れずに記すなら、出口さんは感心させられるほどの勉強家である。休暇中に何かの用事で出校することがあると、出口さんの研究室には決まって電灯が点いている。あるいは、これは夕刻の開演までの時間潰しのためなのかも知れない、と気づいたのは最近になってのことである(呵々)。東京に赴く折りには、早稲田の演劇博物館などへ足繁く訪れると聞いたのも、本書の研究のためであったのだと知れた。本書は、そんな出口さんならではの労作といえる。

*

寡聞にして、私は「研辰」^{とぎたつ}については何も知らなかった。出口さんから長谷川伸も書いていると教えられ、架蔵する「長谷川伸全集」(全十六巻)を開いても、「研辰手向草」「研辰」などは収録されていない。主著の一つである「日本敵討ち異相」を覗いても「研辰」に関する記述は見当たらない。出口さんから初出時のコピーを借りて、ようやくわが敬愛する長谷川伸の「研辰」と出会えた。

「研辰」とは、研師の辰蔵(芝居では辰次)。讃州・阿野郡羽床村に百姓の倅として生まれ、江州・膳所に住んだ。

一八二三(文政六)年八月、幕藩体制がやがて揺らぎ始める頃のことである。辰蔵は妻が藩士である平井市郎次と密通しているのを知り、二人を誅殺して逐電、生地である羽床村に戻った。市郎次の弟である九市と外記の二人がこれを追う。藩では市郎次に非があるのを直接的な理由とはせずに、九市が辰蔵を現場から取り逃がしたことを罪として、仇討を認めない。にも拘らず、である。四年後の文政十年六月、九市、外記の兄弟二人は、ようやく羽床村で復讐を果たした。七月には早速、平井兄弟敵討の瓦版が京坂に出回った、という。九月、兄弟は帰藩を許された。「研辰」の誕生は、これだけの経緯が発端となる。

この年の九月、早くも大阪でこの事件をもととした歌舞伎「敵討高砂松」が上演され、人気をあつめた。そこではすでに、辰蔵の実像、人間性は消され、寝取られ男の苦悩、コキユの嘆きといった内省的テーマは閑却される。娯楽性のつよいドラマトルギーによって、^{にわかざむらい}俄侍とされた辰次は、^{はんどうがたき}「半道敵」という道化のようなキャラクターとなって登場するのだった。「半道敵」は歌舞伎の役柄の一つ、滑稽味を帯びた敵役のこと。町人が武士を殺めるという庶民が喝采するような事実にも則った設定は、土農工商の時代、お上のご意向を憚って、製作者の側が自ら規制したのかも知れない。

*

著者が「研辰」に関心をもって、その探索へと向かったの

は、二〇〇一（平成十三）年に歌舞伎座で初演された「野田版 研辰の討たれ」を観たことが切っ掛けとなった、という。野田秀樹の作・演出で、五代目中村勘九郎（のち勘三郎）が「研辰」を演じた。面白い。しかしそこに著者は「疑問や戸惑い」を覚えたのである。「敵討高砂松」から「野田版」までの百七十四年の間に、「研辰もの」のいくつものヴァリエーションが出現して、「研辰」は狡猾な下級武士になったり、モテモテ男になったり、時代毎に世評を沸かせていた。

「とりわけモデルが舞台の研辰とかなり違うという点に、興味をもった。たとえば『野田版 研辰の討たれ』の家老は、研辰の仕掛けたいはずらに脳卒中を起こして頓死する。だから研辰は家老を殺してはいない。研辰の妻は登場しないから、当然不倫の話もない。にもかかわらず、真相を知らない息子たちの手で、研辰はだまし討されてしまう。こんな展開だから、観客は自然と被害者の研辰に同情し、『敵討』の残酷さを感じるようになる」と記されている（「はじめに」）。「私は研辰という人物を史実や脚本の中に探りはじめ、その結果、幾人もの研辰に出会うことになった」とある（「はじめに」）。その過程の記録が本書の内容なのである。著者は羽床村へ辰蔵の墓を尋ねている。

*

「『妻敵討』として密通した男女二人を殺した人間が、一転して道化的悪役となり、さらに敵討批判の風潮に乗って同情されるべき犠牲者として主役の座を手に入れたものの、そのヒューマニズムが戦時下では仇となって逼塞。戦後に復活したものの、敵討批判のテーマ自体がもはや陳腐となっていた。そこに『大衆社会におけるスケープゴート』という視点を持ち込むことで、研辰は『現代的』再生を遂げる」と、著者による研辰探索の旅は要約される。

著者の探求は丹念に史料・資料を博搜して、精密である。その特色は、

一、「研辰」に付与した性格に、道化、スケープゴート、トリックスター、また「ピカロ的風来坊」などといった現代思想における

格好のテーマを見出しながら、著者は慎重に深入りするのを避ける。新奇な流行に惑わされることなく、上演作品あるいは関連する小説に即して、「研辰」の変貌、進化の過程を見届けるのである。そのストイックな研究態度が好ましい。

一、「研辰」を演じた役者たちについて詳しく触れるのも、著者ならではのことと思われる。役者の演技によって「研辰」は舞台上に生きるのだから。

一、「敵討」「反敵討」の思想性をめぐって、著者の視野は大正十一年に発表された谷崎潤一郎「お国と五平」を捉える。こころ一つの眼目である。また、長谷川伸の仕事に着目して、「小説『研辰手向草』（昭和二年一引用者・註）を通して、研辰という一人の町人の運命に同情の念を示し、敵討讃美の世評に対する疑問を呈した」と記し、さらに小説「研辰」（昭和二十七年）では「『研辰手向草』のような道徳的裁断は後退し、かわって辰蔵の鬱屈や残酷さ、また平井外記の苦悩など、個々の人物の複雑な陰影が描き出される」と指摘される。一人の作家の中で「研辰」が成熟する様相が、資料を踏まえた説得力ある記述によって描き出されたのである。長谷川伸は、いつでも敗者、弱者の味方だった。

と、思いつくままに挙げてみた。

圧巻は、昭和八年初演のエノケン（榎本健一）の歌舞伎レビュー「研辰の討たれ」（菊谷栄・作、榎本健一・脚本、演出）から、クレージーキャッツ・植木等の映画「無責任男」（昭和三十七年）へと繋がる、「研辰」のもう一つの流れを辿る記述である。著者の柔軟な発想力によって、「研辰」はサラリーマン社会に生きるのだった。面白い、感服した。「研辰」はいまも、そこにいる。「戦後は悪党的野性も道化的哄笑も見失った小市民的な研辰像が一般化した、その停滞を打ち破ったのが『野田版 研辰の討たれ』であった」（「あとがき」）とある。

著者は自らを「ヘソ曲がり」と記す。そうかも知れない（ふたたび呵々）。しかしその性格とは一見矛盾するような、ひたむきで地道な努力がここに見事に実を結んだことを嬉しく思う。